

選挙風景の中のディケンズ、ディケンズの中の選挙風景<sup>1)</sup>

中和彩子

はじめに

チャールズ・ディケンズ(1812-70年)は、時代を代表し、表現した作家であり、その著作の多くが時事的なトピックを扱っている。そのトピックのひとつに、下院議員選挙がある。ディケンズは『ピクウィック・ペーパーズ(*The Pickwick Papers*)』(1836-37年)、『荒涼館(*Bleak House*)』(1852-53年)、『我が互いの友(*Our Mutual Friend*)』(1864-65年)という、ちょうど彼の初期、中期、後期を代表する長編小説<sup>2)</sup>の中に、ほぼ同時代の選挙風景を描き込んでいる。いずれの場合も、選挙が中心的テーマやアクションに直接関わる必須のエピソードや風景を成しているわけではない。しかし、小説の文脈を超え、時代の文脈を参照してみるならば、それら3つの選挙表象はただかきそめその言及として見過ごすにはあまりに興味深いものとして立ちあらわれてくる。本稿は、ディケンズとの関係において数限りなく想定できる歴史の文脈の中から、19世紀中期の選挙制度・選挙文化の過渡期を選び出し、ディケンズとその選挙表象がその文脈にどのように関わっているのかを考察するものである。

## 1 選挙制度・選挙文化をめぐる時代状況

ディケンズの生まれ育ったところのイギリスは、工業化の影響が社会の諸側面に現れ始めた時代であったが、彼の青年期、1830年代から激動の改革期に入る<sup>3)</sup>。時代を特徴づけるのは、工業化と都市化の過程で急速に台頭したブルジョワ階級、労働者階級、そして安定した支配力を保ってきた地主階級の間の闘争とそれに伴う諸改革である。選挙法改正は、中でも重要な問題であった。1832年の第1次選挙法改正法は、法案提出から1年余りの紆余曲折を経て成立する。その際、議会外での支持運動が盛り上がり、法案成立に決定的な役割を果たしたことが、それまで参政権から疎外されていた中

流階級に広く選挙権が与えられたことは画期的である。しかし結局は、支配階級が中流階級を体制内に取り込み、支配強化に利用したという保守的な側面の方がむしろ強い改革であった。その徹底しない階級闘争の解決は、60年代に本格的に再燃する選挙法改正への気運に俟たなくてはならない。

19世紀中葉の選挙制度をめぐる状況を語る際、選挙権拡大のほかに見逃せない重要な問題のひとつは、選挙の腐敗である。買収、供応、「懐中選挙区(pocket borough)」に顕著な「影響力(influence)」<sup>4)</sup>などといった悪弊は長年の問題であったが、第一次選挙法改正はその解決にあまり貢献せず<sup>5)</sup>、むしろ40年代、50年代を通じて大きな社会問題となる。54年には腐敗行為防止法が出されて初めて腐敗の定義が明確になり罰則も設けられたものの、意図どおりの効果はなかった。腐敗の伝統は、紆余曲折の末1867年に成立した第2次選挙法改正法で有権者の数が飛躍的に増え、1872年に秘密投票制が導入され、さらに1883年腐敗行為防止法が制定されることによって、漸く終止符が打たれる。ディケンズはこの解決の兆しを見ることなく、1870年に亡くなっている。

以上のように、ディケンズの生きた時代、とりわけ著作家として生きた1830年代から60年代は、ちょうど選挙制度の過渡期と重なっていた。しかし、当時の選挙をめぐる状況を理解するには、制度的側面に注目するだけでは一面的である。

ディケンズは1835年、『モーニング・クロニクル(*The Morning Chronicle*)』の記者として二度にわたって各地をめぐり、下院議員選挙(総選挙、補欠選挙)を取材した<sup>6)</sup>。彼が取材地から知人たちに書き送った手紙の一通は、このように締めくくられている。

私は今日タイムズの男といっしょにノーサンプトンまで行かなくてはならないだろう。...投票は金曜日に始まるが、そうなると昨日の騒ぎと光景とがひっきりなしに、「選挙」が終わるまで繰り返さ

れるだろう。鐘が鳴り、候補者たちが演説し、太鼓が響き、8人のトロンボーン隊(信じられますか?)が吹奏する。男たちはけんかをし、ののしりながら飲み、ちょっとしたことで言い争う。誰もが興奮して騒ぎ立て、恥さらしなことをする。

(To Miss Catherine Hogarth, 16 Dec. 1835)<sup>17)</sup>

このようなばかばかしいお祭り騒ぎが、イギリスの栄えある議会制民主主義を支える選挙とどのように、どうして結びついているのだろうか。我々の目には奇異に映る取り合わせであるが、実は、これは当時の選挙風景の一典型を示しているのである。昨日見たのと同じ選挙風景を別の選挙区でも見ることになるだろうというディケンズの確信的な口吻が、そのことを保証している。

18世紀後半から19世紀半ばにかけてのイギリスにおける下院議員選挙のあり方は、実に独特なものであった。歴史家フランク・オゴーマンは、それを儀式としての選挙キャンペーンという新しい視点から記述している<sup>18)</sup>。その画期的な研究<sup>19)</sup>から、当座必要な情報をまとめてみることにしよう。

イギリスの選挙においては、選挙の公式の手続きが伝統的な民衆文化と交じり合い、年月を重ねて反復される中で、18世紀末までには儀式的な行為として定着していた。この「選挙儀式」は、候補者の選挙区への入場に始まる。そして晩餐会などの供応も含む選挙運動が行われ、候補者指名の日を迎える。当日は、有権者全員が一堂に会する初めての機会であるが、選挙権のない人々も集まって、地域を挙げての行事となる。演壇(hustings)で候補者指名演説が行われ、最後に有権者の挙手による多数決が採られる。敗北した側から結果に異議が申し立てられた場合には、決められた期間中に有権者が各自投票場に行き、口頭で投票(poll)して決せられる。選挙管理官による結果発表に当選者の感謝の演説が続き、当選者を椅子に載せて町中を担ぎまわるといふ勝利と秩序回復の儀式(chairing)がこれに続く。選挙の手順のひとつひとつは、儀式的な行為として有権者だけではなく共同体全体に対するメッセージを発していた。一連の儀式は、視覚的には花火や旗によって、聴覚的には大砲や太鼓、鐘、楽団や歌手によって盛り上げられた。こうして、選挙対策責任者(agent)と委員会の側は、選挙運動にできるだけ多くの人を巻き込むために、民衆文化における強力な伝統的な祝祭とカーニバルの要素に訴えた。選挙区民の側も、選挙儀

式を共同体のイベントとして捉え、選挙権の有無にかかわらず生得的にあるいは伝統的に参加する権利があると考えており、時に体制転覆的な言動へと暴走しながらも結局は秩序の回復・強化に貢献する。ここに作り上げられていたのは、イデオロギー的には伝統的で社会的には保守的な、選挙文化である。選挙儀式は、18世紀後半から19世紀を通じて民衆文化が政治的になっていく過程を反映し、形式はほぼ保たれながらもその意味や象徴性が変質する。一連の儀式の中の多くが、政治的知識・情報や思想の伝達手段となっていく、加えて、党の争点が選挙演説で語られるようになるなど、政党の選挙に対する影響力が着実に増していった。同時に、選挙における地域の自発性と祝祭性は抑え込まれる。伝統的な選挙文化は、秘密投票制が導入されて演壇が消え、選挙風景が劇的に変わるよりも前に、1830年代から60年代の間に衰退し、政党の文化に取ってかわられていった。

このような過渡期の選挙風景の中に、ディケンズは身を置いていた。そして、その選挙風景を小説の中に描いていくことになる<sup>19)</sup>。

## 2 ディケンズの描いた選挙風景

作家ディケンズが選挙をとりあげた最初の作品『ピクウィック・ペーパーズ』は、裕福で善良な老紳士サミュエル・ピクウィック(Samuel Pickwick)が会長を務めるクラブの、彼を含む通信員たちが書き残したイギリス各地の見聞録を、ひとりの編者が物語として再構成したものであることになっている。その第13章(1836年8月発表)は、ピクウィック氏一行が、1827年にイータンスウィル(Eatanswill)選挙区で行われた下院議員補欠選挙の見物に行くというエピソードにあてられており、「イータンスウィル、その党派の状態、及びあの古い、忠義心の厚い、愛国的な選挙区(borough)から下院議員を選挙することについての話」という章題がついている。ここに活写されているのは、民衆が大活躍する「元気のいい選挙戦」<sup>20)</sup>の詳細と、それに付随している買収や供応などの不正行為である。

二つの党派が、ピラや旗、楽団を用いて視覚的にも聴覚的にも派手な選挙戦を仕立て、お祭り騒ぎのような風景が展開している。大っぴらに行われる買収や懐柔も、活気の源である。町の人々は、選挙権のあるなしにかかわらず、それぞれの党が借り切っているパブやインで酒や食事を振舞われたり、よく聞こえない街

頭演説をさらに万歳でかき消したり、小競り合いをしたりして、興奮状態に置かれている。選挙当日、二党派はそれぞれにぎやかな大行列を組んで候補者指名の演壇に向かう。そして、指名演説、多数決の挙手が、野次や乱闘などに邪魔されながら行われる。敗北した側からの申し立てにより、投票が行われることに決まる。投票期間中は、再び供応と買収と懐柔の合戦が繰り広げられるが、結局挙手と同じ結果が出る。

この選挙区の人々は普段から二党派に分かれ、地域の問題をめぐって議論や抗争を盛んに繰り返していると説明されている。今度の選挙戦もその延長上にあり、選挙区民も両党派に担ぎ出された候補者も、国や国政に対する意識を全く見せていない。彼らの振舞は、党派心の旺盛さを愛国心のあらわれと捉えるピクウィック氏を滑稽に見せもする。それでいながらこの二党派はそれぞれトリー、ホイッグを連想させる名——ブルー派 (the Blues) とバフ派 (the Buffs) ——を負われ、機関紙も発行している。人々の本能的、普遍的な党派心<sup>(12)</sup>に基づく伝統的な地元の政治の上に、政党のシステムがつけたして乗せられているかのような状況、これは当時の選挙戦のひとつのあり方を写し取っている<sup>(13)</sup>。こうして『ピクウィック』は、政党組織の未発達な時期の、地域の自発性と祝祭性を最大限に発揮している伝統的な選挙儀式の克明な記録となっている。

1853年3月に発表された『荒涼館』第40章「国の問題とお家の問題」においてディケンズが二度目に描く選挙風景は、これと全く趣を異にしている。

「[時の首相]クードル卿 (Lord Coodle) が政権を投げ出そうとし、トマス・ドゥードル卿 (Sir Thomas Doodle) も入閣しようとしぬい」ことに始まる国政の停滞から、この章は書き起こされる<sup>(14)</sup>。その「恐ろしい危機」は、ドゥードルが首相の座につき総選挙を行うという形で解決する。これはかなりあからさまな諷刺であり、当時の読者は、1851年のジョン・ラッセル卿 (Lord John Russell) とそのホイッグ内閣の総辞職に始まる国政の停滞と翌年7月の総選挙をすぐ思い出したはずである<sup>(15)</sup>。このころの政局を受けて、ディケンズは代議政体批判の論説をいくつか発表しているが<sup>(16)</sup>、『荒涼館』のこの章は、そうした時評の一つとして読むことができる<sup>(17)</sup>。

この選挙は、まずは次のような巨視的な戯画として提示される。

ドゥードルは自分自身をこの国の上に投げかけな

くてはならないと思った——主として金貨とビールの形で。このように姿を変えれば、彼は同時に幾多の場所で役立つことができ、また同時に国内の大部分に自分自身を投げかけることができるのだ。ブリタニア (Britannia) は、せっせと金貨の形をしたドゥードルをポケットにしまい、ビールの形をしたドゥードルを飲みながら、自分はそんなことは絶対していないと…血相変えて誓うのに一生懸命で、ロンドンの社交シーズンも突然幕が下りてしまう。それというのも、全ドゥードル党员 (Doodleites)、クードル党员 (Coodleites) が、全国に散らばってブリタニアが参加するこの宗教儀式の手助けをしているためである。(619-620; ch. 40; 省略筆者)

ここに描かれているのは、党首が「金貨とビール」に象徴される買収と供応を全国一斉に行い、「ブリタニア」と総称される国民がそれを享受しているさまである。当時大きな社会問題になっていた選挙の不正が諷刺されている<sup>(18)</sup>。地域の現実が先にあったイータンスウィルの選挙とは逆に、ここでは、二党による中央の政治が先にあり、不正は中央から末端へと流れる。似通った名を持つ二党派は、章冒頭の戯画の中では『ピクウィック』の二党派と同じく互いに似たり寄ったりの存在として描かれる。『ピクウィック』と異なるのは、この戯画に続いて語られるレスタ・デッドロック卿 (Sir Leicester Dedlock) の選挙活動の顛末においては、野党クードル党と新興ブルジョワジーとが結びついていることが暗示され、選挙戦が新旧社会勢力の間の戦いの様相を呈することである<sup>(19)</sup>。

レスタ卿は、保守的な支配階級を良くも悪くも体现する人物として造型されている。彼にとって本来、選挙は選挙戦ではない。語り手の説明からすると、彼は懐中選挙区を持っており、自分自身を含めて3議席を自由に決められていたらしい。しかし今回は、新興ブルジョワジーと結びついた野党が選挙権拡大のおかげで勢力を伸ばし、レスタ卿の「影響力」に対抗しており、レスタ卿は苦戦を強いられている。語り手は、レスタ卿のために集まってきた親類縁者や、彼らと同一または密接な関係があるらしい「名前のない謎の男たち」の選挙期間中の行動を明らかにせず、彼らの活動の後ろ暗さをにおわせる。また、レスタ卿は身内に対してまで買収費用を「必要経費」と偽り、弁護士タルキングホーン氏 (Mr Tulkinghorn) が自分たちの選挙対策責任者

として活動している事実を否定してみせている。これは、候補者が運動員のしていることに気づいていないというフィクションを保たなくてはならなかった現実<sup>(20)</sup>の写しであり、このようなフィクションのもと、買収が横行したのである。レスタ卿の場合、買収の費用も相当投じたにもかかわらず、結局は3議席とも失ってしまう。こうして、支配階級の独占する国政の停滞と混乱と不正を物語るこのエピソードでは、旧勢力の代表たるレスタ卿は、その旧弊と無能と自己満足といった否定的側面が暴かれ、選挙に惨敗するというストーリーによっても皮肉られることになる。新勢力に対する彼のこの敗北もまた、中流階級の台頭という時代の現実を映し出している。

3つ目の作品、60年代を舞台とした『互いの友』は、成り金のヴェニアリング (Veneering) —— 文字どおりには「化粧張り」—— を始めとする軽佻浮薄な「社交界」の人々に対する諷刺のきいた幾つかのエピソードを脇筋の中に取り込んでいるが、そのひとつである第2巻第3章「一仕事」(1864年10月発表)は、補欠選挙で下院議員に立候補したヴェニアリングと、その選挙運動員として「働く」社交界の知人たちの茶番を描いている<sup>(21)</sup>。『荒涼館』ほどの鋭い時事性はないものの、やはり時代の刻印が明らかである。

ポケット・ブリーチズ (Pocket-Breaches) という選挙区を5000ポンドで買い取ることをある法律家から持ち掛けられた成り金のヴェニアリングが、取り引きに応じて議員に立候補する。ヴェニアリングは買収のことはあくまで他言せず、ポドスナップ (Podsnap) やトゥェムロー (Twemlow) をはじめとする社交界古参の知人たちの協力を得て委員会を結成し、もっともらしく形だけの選挙運動を行う。「運動員」たちは、お人好しのトゥェムローを除き、言われなくても買収のからくりを知っており、ヴェニアリングへの軽蔑心を新たにしながらも茶番に参加し、むやみに走り回る。選挙当日になって初めて選挙区に赴いたヴェニアリングは、くだんの法律家のお膳立てに従って選挙区民たちに向かって演説をし、挙手によって当選が確定する。

ヴェニアリングのような新興ブルジョワが下院に入ることは、時代の文脈からすれば、社会的に積極的な意味も持ち得たはずである。『荒涼館』の選挙においては、レスタ卿一派が新興ブルジョワジーの台頭に脅かされている状況が浮き彫りにされ、貴族・ジェントリによる政治支配体制の揺らぐ時代を予感させていたが、実

際には60年代に入ってもまだ、下院を圧倒的に代表するのは貴族・ジェントリだったからである<sup>(22)</sup>。しかし、ディケンズの小説の中でもとりわけ、成り上がりということに一貫して負の価値を置くこの小説において、ヴェニアリングはイデオロギーのひとつから持ち合わせず、議員になってからも紳士として認められるようになるわけでもなく、「収入以上の生活」をして「汚職に汚職を重ね」たあげく職を退く運命にある (815; ch. the last, bk.3)。

ヴェニアリングが買った、ポケット・ブリーチズ —— 文字どおりには「ポケットの破れ・違反」—— は、当然懐中選挙区 (pocket borough) を連想させる諷刺的な名前である。『荒涼館』におけるレスタ卿の懐中選挙区への挫折した影響力は、時の政治社会の文脈上で好意的に解釈するならば、「階層的社会にあっては不可欠な正統的な」支配力であり、腐敗として単純には否定され得ない根拠をもっていたといえるかもしれないが<sup>(23)</sup>、ヴェニアリングが金で買った「影響力」は、正統的というにはほど遠い。この選挙区の命名には、1832年の選挙法改正では除去できなかった悪弊の残存と成り金の勃興に対するディケンズの皮肉な見方があるといえよう。この皮肉は、人々が一応は当選の感動を味わったあと、章の最後でお人好しのトゥェムローが突然まやかに気づいて独りつぶやくところで頂点に達する。「何てことだ! 落ち着いて考えてみると、彼 [ヴェニアリング] は生まれてこのかた一度も自分の選挙区民を一人たりとも見たことがなかったのだ。今日私たちといっしょに見るまでは!」(254)

選挙区の人々の描写もまた注目に値する。指名演説の日、ヴェニアリングはポドスナップとトゥェムローと共に選挙区入りし、「法律家」に迎えられる。そして『ヴェニアリングよ、永遠に!』と書かれたポスターを貼った無蓋の馬車で「当地の住民たちのにやにや笑い (the grins of the populace) の中を意気揚々と進んで、松葉杖みたいに突っかい棒をかられた、たよりない小さな公会堂に着く。... さてヴェニアリングはこの建物の道路に面した窓から顔を出し、ひたすら静聴する地面を相手に演説を始める」(251-252)。演説中のヴェニアリングが立ち往生する様子は、次のように描かれる。

ヴェニアリングは、いつもながらの演説の「通行止め (No Thoroughfares)」で道を見失ってしまう。するとポドスナップとトゥェムローが謹聴謹聴と叫ぶ。時々、ヴェニアリングがどうしてもあいにく

の「通行止め」にあって戻るにも戻れなくなると、きーんちょう、きーんちょうと、ひょうきんな自信たっぷりの様子で叫ぶ…。(252)

語られているのは、選挙区民が候補者の選挙区入場に立ち会い、演壇へと集合するという重要な選挙儀式である。しかし、ここには生き生きした音も色も一切ない。風景は、ヴェニアリングによる選挙儀式の形骸化に付き合わされるかのように粗末であり、人々もまた、『ピクウィック』のイータンスウィル選挙区民とは対照的に、身体と声を奪われている。この表象は同時に、金の力と政治システムの強制力の前で個々の立場が無視されざるを得ない、選挙区民の無力と無力感を象徴しているかのようである。また、人間が抽象化される不気味さは、候補者側から見た場合には、秘密投票の時代を予兆するかのようである。

### 3 ディケンズの中の選挙風景

ディケンズの以上の3つの選挙表象を歴史の時間軸上に並べてみるならば、おおざっぱではあるが、差異を変遷として捉えることができる。政党・議会・国政とは全く無関係であるかのような地域の党派争いの様相を呈している『ピクウィック』の選挙戦に対して、『荒涼館』『互いの友』においては、19世紀半ば以降の政党組織・政党文化の発達とそれに伴う選挙儀式の衰退を反映するかのようになり、中央に議員を送るための選挙という意味付けが前面に出て、民衆の役割はほとんど無視されている。また、選挙の不正という点に注目すれば、大っぴらで明るい供応と買収の横行する『ピクウィック』の時代から、50年代を経て買収がより大掛かりで巧妙になり実態が見えにくくなる『荒涼館』、『互いの友』の時代へと移り変わる。

しかし、テキストのすべてが歴史のコンテキストに還元されるわけではない。描かれた選挙風景は、いかに現実の忠実な再現となっていようと、そこには作者のまなざしが介在している。ディケンズという個人もまた、彼自身の描いた選挙表象のコンテキストとして存在するのだ。ここまでの論では、どのような選挙風景の中にディケンズがいたのかという関心から、ディケンズの選挙表象を読み解いてきた。以下では、ディケンズが選挙風景をどのように受け止めていたのかに注目したい。それは、いわばディケンズの中の選挙風景を読み解く作業である。<sup>(24)</sup>

ディケンズは、1835年12月にノーサンプトンシャーの補欠選挙を取材しているが、彼の書いた記事<sup>(25)</sup>と二通の私信<sup>(26)</sup>とは、トーリーとトーリーに抱き込まれた選挙区民への不信、侮蔑と非難とにあふれている。例えば、

トーリーによって試されない策略はひとつもなく、使わずにおかれた圧力 (influence) は何もなく、顧みられなかったごまかしの手はなかった。そしてその栄誉ある結果はこうである。イギリス全土で最も無知で、酔っ払った、畜生のような (brutal) 有権者たちが、ブタの群れ (herds of swine) のように、えさを振舞われ食わせられ、[投票日の] 一日中投票所へと追い立てられて [馬車で連れて行かれて、という意味を掛けている]、投票した結果、マンセル氏 (Mr. Maunsell) [トーリー候補] が最高の投票数を得た。<sup>(27)</sup>

この強い政治意識と不正に対する潔癖さは、この時の取材をもとにしている『ピクウィック』のテキストの表面には全くにじみ出ていない。彼が繰り返す「ブタ」にたとえている有権者たち<sup>(28)</sup>と同じことをしているのにもかかわらず、イータンスウィルの人々がここまで侮蔑的に描かれることはなく、「群衆のわめきは、象が冷肉を要求してベルを鳴らしたときにまわりの動物たちがいっせいに咆哮うなった声のようだった」(239; ch. 13) という滑稽なたとえがせいぜいである。

初版から10年を経た1847年の『ピクウィック』「廉価版 (Cheap Edition)」の序文において、ディケンズは、作品を読み返してみると執筆当時から現在までに重要な社会の諸改革が行われたことに気づかされて面白いと述懐する。その中で、「議員選挙の執り行われ方 (特に州選挙区の場合) における改善は、まだ可能性の域を出ない」という評価を加えている (Pickwick 46)。持ち前のトーリー批判とは切り離れたより一般的な態度で、旧態依然とした選挙の方法に対して苦言を呈するディケンズであるが、イータンスウィル選挙の挿話は、おかしみが主であり、とびきりの明るさを放っている。諷刺の本質は、おかしみ、笑いの中に批判のとげをひそませることにあることは確かである。しかし、ディケンズが序文において「選挙の方法」を挟んで列挙している他の社会問題——弁護士の放縦、債務者監獄などは、小説の中で深刻な扱いを受け、重いメッセージを発する挿話を形作っている。例えば弁護士の放縦については、第34章のバーデル (Bardell) 対ピクウィッ

ク裁判の挿話(1837年2月発表)において、その8ヶ月前に記者として取材したセンセーショナルな裁判の明らかなパロディを通じて辛辣な批判をしている<sup>(20)</sup>。ディケンズは、この裁判の翌日に友人に出した手紙の中で、「一日中床についていたのに、今夜は死ぬほどくたびれている。メルバーン対ノートン[裁判](Melbourne v Norton)は、私をめちゃくちゃにってしまった」という感想を述べている<sup>(21)</sup>。ディケンズが不快な取材経験に基づいて批判の目を向けた二つのトピックのうち、一方は当然のように深刻な挿話を形作っているのに対し、他方は明るい挿話を成す。ここに、ディケンズが選挙風景を捉えるまなざしの複雑さがある。

章の冒頭で、編者は「ピクウィック・クラブの膨大な書類に没頭し始めるまで、イータンスウィルなどという名前は全く聞いたこともなかったこと」、そして「今日そうした場所が実際に存在する証拠を探してみたが無駄だったこと」を告白し、次のような推論をしている。

従って、私たちは信じなくてはならなくなる。ピクウィック氏は、誰をも立腹させたくないという切なる望みをもって、そして、あの繊細な感情——彼を知る人なら誰でも、それがピクウィック氏の大きな特徴であることを知っているわけだが——をもって、彼は自分の観察した地の実名の代わりに、わざと架空の名称を与えたのだ、と。(237)

「イータンスウィル(Eatanswill)」には明らかに「飲み食い(eat and swill)」という諷刺的響きがあり、そこには当然命名者の観察眼とユーモアにくるまれた批判精神とが発揮されているはずである。しかし、小説全体を通じてピクウィック氏の善意を強調したがる編者は、その響きに気づかぬ様子をしている。続いて編者は、選挙区のモデルが特定されぬようにという配慮からピクウィック氏が記録の一部を線で消してしまっていたことを告げる。ピクウィック氏の周到な隠蔽は、彼の選挙区に対する批判精神を裏書きするものであるが、語り手はこの事実をあくまでピクウィック氏の「配慮」を称賛するために提示している。

そしてまた、風景の中でもピクウィック氏の批判精神はテキストの表面には表れない。ピクウィック氏は何より人々の活気への関心をあらわに見せている。彼は、選挙対策責任者のパーカー氏(Mr Perker)に「元気のいい選挙戦(spirited contest)」だと保証されると「もみ手

をして」喜んで、「不屈の愛国心を見るのはいいものだと思います。それがどんな党派のために奮い起こされるにしてもね。——すると、これは元気のいい選挙戦というわけですね?」と言っている(240)。そして、選挙当日の朝には、何もかもが活力に満ちて(alive)いるか、人々が自分の党に一生懸命であり、精力的で(energetic)あるように見えるかを、従者のサム(Sam)に報告させている(246)。ところが、選挙にまつわる不正の実例の数々をパーカー氏やサムから聞かされる時、ピクウィック氏の反応は鈍い。彼の反応のほとんどは感嘆符つきの鸚鵡返しか判断保留である。

例えば、敵側が日和見の有権者たちを馬車置き場に監禁していることを、パーカー氏から聞かされたピクウィック氏は、「馬車置き場に!」と「相当驚いて(considerably astonished)」叫ぶ(240)が、さらに敵が用心のためその有権者たちを酒に酔わせているということを知らされると「目を見開いたが、何も言わなかった」(241)。この態度に関しては、世話になっているパーカー氏に対するピクウィック氏の配慮ということで説明がつくかもしれない。しかし、ピクウィック氏は従者のサムが相手であっても批評精神を発揮しない。「人があんなに飲み食いするのをいまだかつて見たことがない」と、供給の状況の報告と感想を述べるサムに対し、ピクウィック氏は「それは、ここのジェントリの間違った親切というものだ」と答える(246)。これが、ピクウィック氏の最も批評的になった瞬間なのであるが、彼の関心は何故かすぐに窓の外の人々の活気へと戻り、「彼らは気持ちのいい、元気で、陽気な連中らしいな」というのが次のコメントである(246)。ピクウィック氏はまた、対立党派の有権者の酒に眠り薬を盛って投票に行かせないという作戦が実行された話を聞くと、「独り言とも、サムに話しかけるともつかずに、『奇妙な慣例だね、そういうのは』と言った」(247)。饒舌なサムは、そのコメントにかぶせるようにして、自分の父親がこの地で関わった出来事の方が倍も「奇妙」だったと長話を始め、ピクウィック氏はほとんど口を挟む余地がない。その話は、要約すれば、御者をしていた彼の父が二重に買収され、結果として自分の馬車を故意に転覆させて一名の死者まで出してしまったという非道な話であるのだが、ピクウィック氏は話の終わりが見えた途端「本当に驚くべき出来事だ」というお座なりな相づちを打ってけりをつける。実はピクウィック氏は、朝食ができたと呼ぶ声に、話の途中から気が急いでいたらしいのである。

以上のことからわかるのは、作者は、編者にはピクウィック氏の批評的な態度を「配慮」という言葉の内に封じ込めさせる一方、ピクウィック氏には窓の外の活気や朝食という気を散らす材料を与えるというやり方で、ピクウィック氏が批判を表明する機会を取り上げてしまっていることである。この効果は、候補者指名の会場に向かう二派の行列の衝突と大乱闘の場面において、最も強烈に視覚化する。ピクウィック氏はブルー派の馬車に乗っていて混乱に巻き込まれるが、

どうして、どんな方法で、この行列が別の行列と合流してしまったのか、つづいて起こった混乱からどうしてそれが抜け出せたのかは、ピクウィック氏の帽子がそのはじめにパフ派の旗ざおで打たれて、自、鼻、口にかぶさってしまったので、なんともいえない。…彼は、自分が目に見えぬある力によって馬車から引き出され、自らが拳闘試合に参加したと述べているが、それが、誰が相手に、どんなふうで、なぜだったかは、全然わからない。(250; 省略・強調筆者)。

こうしてディケンズは、選挙風景の中のピクウィック氏を危機的なあるいは批評的な瞬間から常に回避させ、明るく楽しい選挙風景の体裁を守っている。この種の作為は、ディケンズが『ピクウィック』を選挙法改正以前の昔の選挙ということにし、選挙区を二分する党派にトーリーやホイッグを思わせる命名をしながらもそれらのイデオロギーを担わせなかったことにも見て取ることができよう。

ディケンズは、1835年12月の『モーニング・クロニクル』の記事に見られたように、不正や腐敗をも許容してしまうような選挙の執り行われ方に対しては明らかに批判的であり、改善を望んでいた。しかし、眼前に展開する選挙戦には、間違いなく伝統的なお祭り騒ぎの楽しさとおかしみがある。その両者のはざまに立つ作者のアンビヴァレンスこそ、『ピクウィック』の選挙風景というどたばたの諷刺劇を可能にしたのである。

2つめの作品『荒涼館』には、ディケンズの選挙に対するどのようなまなざしが読み取れるだろうか。選挙儀式を諷刺をかきさせた笑劇として提示する姿勢はここにはもうなく、選挙方法に対する彼本来のというべき批判精神があらさまである。それは勿論、民衆文化としての選挙儀式の伝統の衰退という現実上の風潮が、

『ピクウィック』のテキストに刻印されているようなディケンズのアンビヴァレンスを解消させたという引き算の結果でもあるわけだが、彼の批判の対象の微妙な変化にも、実は注目しておく必要がある。

ディケンズは、この小説で一貫して貴族・ジェントリ階級の旧弊と無能、排他性と自己満足を諷刺している。議会・政党・政府を牛耳る支配階級を成す彼らにとっては「[権力者とその一族郎党]だけが舞台を独占する名優たちなのであり、それ以外の者は「永久に舞台に登場することができない。」そして、「なるほど、国民というものがあるが——これはその他大勢の大部屋役者で、芝居の舞台におけると同様、ときたま言葉をかけられたり、叫び声を挙げたり、合唱したりするのが役目で」ある(212; ch. 12)。このようなエリートの論理が、選挙の章の冒頭の、クードルとドゥードルの仲違いが即政治を停滞させてしまう状況、二人がもし決闘をして共に倒れたら、彼らの息子たちが大人になって親たちを継ぐまでは政治が動かないのではないかとさえ思われるような状況を生んでいる。支配階級が独占する政治を、ディケンズはこのように辛辣に諷刺したのである。そして、やっと首相の座についたドゥードルが行った総選挙での不正は、既に見たように、党首ドゥードルが「金貨とビール」に変身して全国各地に一斉に姿を現し、「ブリタニア」と総称される国民が、全国に散らばった党員たちに手助けされながらそれを享受するという戯画に描かれていた。そこに「宗教儀式」のイメージがかぶせられていることは、買収の組織化と定式化を暗示するとともに、党首の権威の絶対性と、彼を頂点とし儀式的の受け手「ブリタニア」を底辺に置くヒエラルキーをも暗示する。支配階級の人々の会話の中では「大部屋役者」にたとえられてもいた国民は、ここにおいて徹底的に個性を否定されている。この小説で代議政体という「近代的」なシステムの内実を揶揄するディケンズは、選挙を、そのシステムの一部でありかつシステムの本質を象徴するような制度として表象している。

『互いの友』の選挙の章は、非常に奇妙なイメージで幕を開けている。

ブリタニアは、ある晴れた日に座って考えに浸っていて(ひょっとしたら、銅貨に表象されている姿で)、突然ヴェニアリングが国会に必要だと思いつく。彼女の頭には、ヴェニアリングは「代表的な

人物（‘representative man’）だ——それは最近では疑い得ないこと——という考えが浮かぶ。そして女王の忠実な下院は彼なしでは不完全だという考えが浮かぶ。そこでブリタニアは、知り合いの法律家に向かって言う。もしもヴェニアリングが5000ポンド「置く（‘put down’）」なら、名前の後ろに二つの頭文字 [M. P. を指す] を付け加えてもよろしい。1文字につき2500ポンドという非常に安い価格で。ブリタニアとかの法律家との間には、明白な了解がある——何人もその5000ポンドを「拾い上げる（‘take up’）」ことはないが、置かれた途端その金は魔法の術によって消え去るであろう。（244）

この後「法律家」がヴェニアリングのもとへ走ると同時に、ブリタニアは退場して現実的な描写が戻り、そこにおいて既に触れたようなヴェニアリングらの茶番が展開する。この法律家は、働きから見て『ピクウィック』のパーカー氏、『荒涼館』のタルキングホーン氏にあたる選挙運動の事務を司る責任者である。ところが、この章の修辭では、選挙対策責任者として働く「法律家」の上に彼を操る「ブリタニア」という存在が置かれている。

『荒涼館』においては、イギリスの国民全体を指す記号として「ブリタニア」が使われていたが、この小説で登場しているのは、図像の説明からして、むしろ本来の用法というべき国家の擬人化としての「ブリタニア」である。実在する黒幕の裏にさらに「ブリタニア」という黒幕を存在させる修辭は、目には見えない「国家」こそが腐敗した選挙の元締めであることを暗示している。つまり、ここで腐敗した選挙の根源として提示されるのは、『ピクウィック』の時のように駆け引きを楽しむ選挙対策責任者個人でも、『荒涼館』で描かれたように選挙に政党の命運をかける党首でもない。国家システムそのものなのである。政府や議会あるいは政党が、都合の良い議員を入れようとして汚い手を用いて当選させている。名前を持たない法律家と「ブリタニア」の共謀関係にはディケンズの国政に対する不信と批判がこめられているといえよう。

以上のように見てきたディケンズの選挙表象の変遷は、一方で、買収などの不正が組織化し大掛かりになると同時に実態が見えにくくなっていく現実を映し出していることは確かである。しかし、選挙の不正のあり方が、一斉に変質したと考えるのは誤りである。例えば、1827年の選挙ということになっている『ピク

ウィック』では、パプヤインを借り切って人々に供応したり、馬車を雇って有権者を投票所に運賃無料で連れて行くという票獲得作戦がおこなわれている。が、それは、『パンチ』1847年8月21日号の漫画「買収は憎むべきものだ。が、思いやりには金はかからない」<sup>[11]</sup>でも、それから20年近く経った『一年中』1865年7月22日号の記事「選挙期間」<sup>[12]</sup>においても、現在横行している悪習として批判されている。つまり、ディケンズは、1836年に『ピクウィック』で批判をこめて描いたような不正の実態を、53年、64年発表の作品にもリアリティを損なうことなく取り入れることは可能であった。しかしディケンズはそうしない。党首を不正の根源と捉え、金貨とビールに変身した党首が全国に降るという象徴的な図を描いた彼は、次いで、国家がM.P.の文字を成り金に売りつけるという構図を提示した。現実の風景の変化にディケンズの視線の変化が加わって、彼の中の選挙風景の変遷に与っている。

#### 終わりに

ディケンズは、1847年の『ピクウィック』「廉価版」の序文で、執筆当時を振り返り、以来成されてきた社会問題の改善について述懐をしていた。それから20年後の1867年——『互いの友』の2年後である——に出版された「チャールズ・ディケンズ版 (Charles Dickens Edition)」は、前の版のものに少し手を加えただけの序文をつけている。社会問題の改善についての述懐の部分もほとんどそのままであり、『ピクウィック』が最初に世に出た1836-37年当時から10年経っても20年経っても社会は結局変わっていないというディケンズの苦い認識を感じさせる。しかし、ただ一個所だけ、その述懐の中で書き換えられている語句がある。1847年版では、「議員選挙の執り行われ方 (特に州選挙区の場合) における改善は、まだ可能性の域を出ない」とされていた(46; 強調筆者)。1867年版では、その括弧内が差し替えられ、「議員選挙の執り行われ方 (そしてひょっとしたら議会の、までも) における改善は、まだ可能性の域を出ない」と書かれているのである(52; 強調筆者)。一見、ごく些細な書き換えである。しかし、本稿で追ってきた、ディケンズの置かれた選挙風景、ディケンズの中の選挙風景の変遷を思い出すとき、この序文の書き換えが、非常に象徴的なものに見えてくる。

ディケンズは、小説家としてのスタートを切ったとき既に、速記者・記者としての経験から議員や議会に不

信と侮蔑の念を抱き<sup>93</sup>、また、議員選挙の方法にも批判の目を向けていた。しかし、彼が『ピクウィック』で選挙風景を描いたとき、眼前のいわば土地の祭りとしての選挙儀式的楽しさに圧されてはいるが存在する批判の目は、眼前の不正を突き抜けて中央を形成する議員や議会政治批判と結びつくことはない。貴族・ジェントリが議会政治の担い手であることを言明している『荒涼館』は、ドードルという党首が全国一斉に組織的に不正な力を及ぼすという修辭を用いている。ディケンズはここで、システムとしての選挙、その中枢にいる支配階級に批判の目を向け始めている。そして最後の『互いの友』においては、ブリタニアという国家そのものを表す存在を不正のシステムの頂点に見出すのである。

この3つの選挙風景の変遷は、一見、リアルな現実描写から硬直した戯画への後退のように見えるかもしれない。しかしこれこそ、ディケンズのまなざしが社会問題の現象面から原因へと向かっていく過程、その結果批判が国の中枢へと迫っていく過程を刻印している。『ピクウィック』序文の書き換えは、ディケンズの現実に置かれた選挙風景、ディケンズの中の選挙風景の絡み合った変化を、端的に表すものだった。

## 註

- (1) 本稿は、1997年6月28日、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻・教養学部地域文化研究学科共催 第5回地域文化研究シンポジウム「選挙は鏡 社会を映す——投票箱から見た地域文化——」において発表した原稿「ディケンズの描いた選挙風景」に基づいている。
- (2) 3作とも月刊分冊形式で発表の後、本の形にまとめられた。
- (3) 以下の歴史的記述は、Asa Briggs, *The Age of Improvement 1783 - 1867* (London: Longman, 1959) 236-523; 村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』(ミネルヴァ書房, 1980) 49-58; 村岡健次、木畑洋一編『イギリス史3近現代』(山川出版社, 1991) 71-118に依拠している。
- (4) 「懐中選挙区」とは、地主階級に属する特定の個人ないしは家族が事実上支配下に取り込み、そこでの選挙を意のままに左右することのできた都市選挙区のことである。「影響力」のさまざまな形態については、Briggs 266-267参照。
- (5) 懐中選挙区は数は減らされたものの、なお相当数のものが残存し、新たに作り出されたものさえあった。(Briggs 261; 村岡・木畑 80)
- (6) ディケンズの取材地・記事の特定は、George Newlin, comp. and ed., *Everyone in Dickens*. Vol. 1 (Westport: Greenwood, 1995) 132-154に拠った。
- (7) Madeline House and Graham Storey, eds., *The Letters of Charles Dickens* Vol. 1 (Oxford: Clarendon, 1965) 107.
- (8) Frank O'Gorman, 'Campaign Rituals and Ceremonies: The Social Meaning of Elections in England 1780-1860', *Past & Present* (May 1992) 79-115.
- (9) O'Gorman自身が研究の新しさを主張している(80,115)のみならず、John A. Phillipsは、1832年の意味づけ及びそれ以前の政治システムをめぐる歴史家たちの長年の議論の紛糾にO'Gormanのハノーヴァー朝の選挙研究がひとつの決着をつけたとしてその権威を認めている。*The Great Reform Bill in the Boroughs: English Electoral Behaviour 1818-1841* (Oxford: Clarendon, 1992) 5-7参照。
- (10) 下院議員選挙は、18世紀後半からジャーナリズムや諷刺画などの領域で定番のテーマになっていたが、19世紀に入り、政治改革の気運と軌を一にするようにして小説家たちにも取り上げられるようになる。ディケンズはその先駆けのひとりとして位置づけられる。選挙表象の歴史については、H. G. Nicholas, *To the Hustings: Election Scenes from English Fiction* (London: Cassell, 1956)の、特に Introduction (vii- xviii)参照。ヴィクトリア朝小説に描かれた選挙を資料として分類集成することを通じて制度史・文化史を記述した網羅的な研究としては、Richard D. Altick, 'The Free and Independent: I, II', *The Presence of the Present: Topics of the Day in the Victorian Novel* (Columbus: Ohio State UP, 1991) 668-758.
- (11) Charles Dickens, *The Posthumous Papers of the Pickwick Club* (London: Penguin, 1972) 240. 以下、この作品からの引用はすべてこの版に拠り、本文中にページ数を記す。なお、日本語訳は、北川悌二訳、『ピクウィック・クラブ 上』(1971; ちくま文庫, 1990)を参考にした。

- (12) Stephen Ingleは、「政党とは何か」を論ずる中で、政党の根幹には党派心という普遍的な感情があると述べ、『ピクウィック』のイータンスウィルの二党派についてのくだりを、その例として引用している。*The British Party System* (Oxford: Basil Blackwell, 1987) 6.
- (13) Altickによれば、当時の選挙人にとっては国の問題より地元の問題のほうがはるかに重要であった(733-38)。Phillipsの厳密な歴史研究に従えば、このことは必ずしもすべての選挙区にあてはまるわけではないが、本稿ではその議論には立ち入らない。
- (14) *Charles Dickens, Bleak House* (London: Penguin, 1971) 619. 以下、この作品からの引用はすべてこの版に拠り、本文中にページ数を記す。なお、日本語訳は、青木雄造・小池滋訳『荒涼館3』(1975; ちくま文庫, 1989)を参考にした。
- (15) Susan Shatto, *The Companion to Bleak House* (London: Unwin Hyman, 1988) 236-37; John Butt and Kathleen Tillotson, *Dickens at Work* (London: Methuen, 1957) 188-89.
- (16) Shatto 125.
- (17) 月刊分冊形式で発行される小説は、ジャーナルとしての役割も果たすこともあった。『荒涼館』の時事性については、John Butt and Kathleen Tillotson, *Dickens at Work* (London: Methuen, 1957) 177-200; Norman Page, *Bleak House: A Novel of Connections* (Boston: Twayne, 1990) 27-42参照。
- (18) 例えば1841年議会は「買収議会」として知られることになり、また52年には、買収が前代未聞の横行を見せているという一致した認識が有識者たちにあったらしい(Briggs 265-66)。
- (19) Altickによれば、レスタ卿の選挙は、小説に描かれた選挙が一貫して擁するテーマである新旧勢力の戦いを、最も凝縮的に表現している(678-679)。
- (20) K. J. Fielding, ed., *The Speeches of Charles Dickens* (Oxford: Clarendon, 1960) 162n.
- (21) Charles Dickens, *Our Mutual Friend* (Oxford: Oxford UP, 1989). 以下、この作品からの引用はすべてこの版に拠り、本文中にページ数を記す。なお、日本語訳は、間二郎訳『我が共通の友(上)』(ちくま文庫, 1997)を参考にした。
- (22) 村岡 51.
- (23) 第一次選挙法改正で懐中選挙区が撤廃されなかったのは、「影響力」が、単に財産に由来する非正統的なものと、階層的社会にあっては不可欠な正統的なものとに区別され、「腐敗」として除去されたのは前者のみだったからである。(村岡 55-56 参照)
- (24) ディケンズは、1841年以来何度か議員選挙への出馬の機会があったがいずれも断っている。John Forster, *The Life of Charles Dickens Vol.1, rev. A. J. Hoppe* (London: Dent, 1966) 147. この態度は、同時代の他の作家たちの多くが出馬経験をもち、その経験を小説へと加工していることと比較するととりわけ興味深いが、本稿では立ち入らない。
- (25) 'Northamptonshire Election', *Morning Chronicle* 16, 17 and 19 Dec. 1835.
- (26) To John Macrone, 17 Dec. 1835 (House and Storey 108); To Miss Catherine Hogarth, 18 Dec. 1835 (House and Storey 109-110).
- (27) 'Northamptonshire Election,' *Morning Chronicle* 19 Dec. 1835.
- (28) 引用記事中の「ブタの群れ」のほか、2通の私信に「“保守派”という名でこのパブで転げまわっている汚らわしいブタども (bestly swine)」、「青ブタども (blue swine)、言い換えるなら保守党の有権者たち」(House and Storey 108, 109)とある。
- (29) 裁判のモデルと時事性については、小松原茂雄『ディケンズの世界』(三笠書房, 1989) 86-87; House and Storey 153, n.3を参照。
- (30) To John Macrone, 23 June 1836 (House and Storey 153).
- (31) 小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ 図像で読む19世紀世界1』(柏書房, 1995) 図版1-44.
- (32) 'Election Time', *All the Year Round* Vol. 13 (Tokyo: Hon-no Tomosha, 1991) 605-607.
- (33) Michael Slater, ed., *Dickens' Journalism: Sketches by Boz and Other Early Papers 1833-39* (Columbus: Ohio State UP, 1994) 151-52 参照。例えば、*Sketches by Boz* (1836年) 所収の 'Parliamentary Sketch' で、ディケンズは議会・議員をあからさまに諷刺している (Butt and Tillotson 52-53)。